

アイデアの「臨界」に向かって——「哲学すること」について

東北大学(大学院文学研究科)名誉教授 座小田 豊

「哲学 Philosophieを学ぶことはできない。哲学することPhilosophierenを学ぶことができるだけである。」
(I.カント、1724-1804、『純粹理性批判』B865f.)

完成した哲学思想 市井の哲学(者)

EX. アリストテレス
トマス・アクィナス
デカルト
スピノザ
カント
フィヒテ
ヘーゲル
ハイデガー ETC.

言語・概念・論理・歴史・文化などの高い壁

理解したいという意欲・反復的学習

学ぼうとする人々

世間に溢れる数々の「哲学(者)」
Ex. 現代の名工: 宮大工・西岡常一氏

1

ἰδέαの「臨界」と「哲学すること」

「哲学することphilosopheo(ギ) = 知を愛すること」という実際的なエクササイズとは、そして、それを学ぶとはどのようなことなのか。古代ギリシアの神話的な理解から学ぶ。

1. 「哲学すること」を、「見ること、考えることhorao (ギ) : Denken」だと理解するなら⇒
2. 「真なるもの」である ἰδέα を「考えることιδέειν (ギ)」を学ぶことが「哲学すること」、つまりは
3. 「考えること」とἰδέαとの「臨界点Critical Point」を探ること、ἰδέαの「臨界」に触れることすなわち、ἰδέαを「知ること」とはどういうことかを「考えること」である。

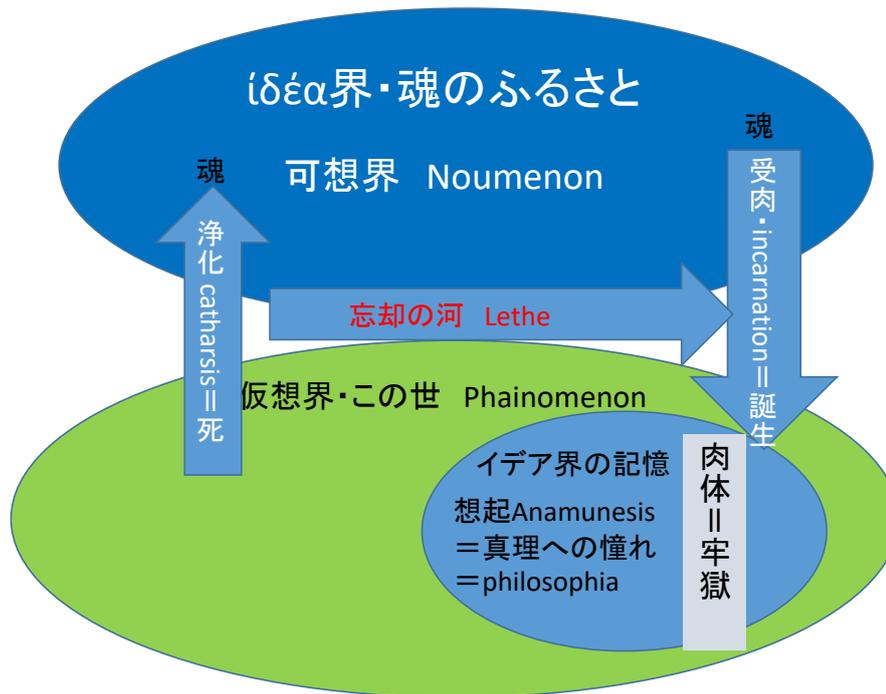
* 知るという営みは「真なるもの」というἰδέαをベースにして、それを求めるもの、真なるἰδέα = 真理を前提にしなければ、「知ること」の、それゆえ「考えること」の一切は無意味

* 「知らないことを知っている」というソクラテス「無知の知」も、「知の根拠」であるἰδέαを確信

では、ἰδέαとは、そしてその「臨界」とは何か？

2

プラトン(ca.Bc427-347)のイデア論(『国家篇』エルの物語)と哲学



3

プラトンのイデア論と哲学

「人間の魂は不死、 $\text{i}\delta\epsilon\alpha$ の世界という理想郷(noumenon (ギ) 可想界)が「故郷」。魂が受肉してこの似像eikon (ギ)の世界(phainomenon (ギ)現象界)に生まれた後、絶えず故郷への郷愁に苛まれる。この苦悩あるいは羨望＝真理への探究心

魂が「故郷」の記憶を想起することが真理を知ること＝アナムネーシス

recollection, memory, remembrance: Erinnerung(独)」。

$\text{i}\delta\epsilon\alpha$ は永遠普遍なものであって、それがわたしたちに「永遠の今」として立ち現れる。魂の過去の、つまり $\text{i}\delta\epsilon\alpha$ 界での記憶の内容もまた永遠である。そして、この記憶の「竖穴」を掘り進んで、行き着いた魂の「光の源」が $\text{i}\delta\epsilon\alpha$ であり、**このアルケーとしての $\text{i}\delta\epsilon\alpha$ の探究が哲学すること**、つまり「知を愛すること」だというのである。

- ご覧のように、この $\text{i}\delta\epsilon\alpha$ は、エルの物語を信じない私たちにしてみれば、文字通り「観念idea」だということになろう。しかし、 $\text{i}\delta\epsilon\alpha$ は単なる「観念idea」ではない。
- 哲学者たちは古来、これこそを「真の实在ousia」とみなしてきた。ということで、ここではさしあたって、「真なるもの」という根源的な広い意味を担う語として、ideaとは区別して $\text{i}\delta\epsilon\alpha$ というギリシア語で表記していくことにしたい。

4

German Idealismとは？

「ドイツ観念論」は観念論idea-lismなのか、ιδέα-lismなのか？

○カント(1724-1804): Vernunft (Idee: 純粹理性の理想: 神、自由、魂の不死)

* カントの言う「二世界説: 叡智界mundus intelligibilis (ラ)と感性界mundus sensibilis (ラ)」はプラトンの「イデア界と似像界」の思想の継承

○フイヒテ(1762-1814): Wissen, Gewissen (良心: 義しい、聖なる人々の共同態)

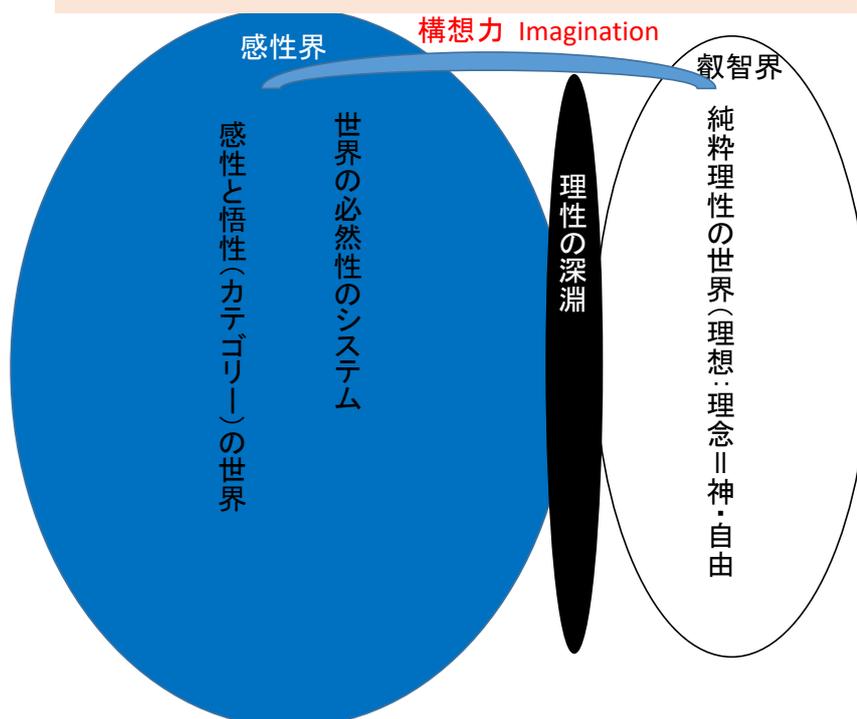
○シェリング(1775-1854): Urwissen, Allwissen (根源知: 一者=万人に共有される)

○ヘーゲル(1770-1831): absoluter Geist (絶対精神: 主体の自己覚醒によって成就される人間の本质)

* いずれもプラトンのιδέαの思想を継承。したがって、決して単なるidea-lism(観念論)ではない。ιδέαの現実性、実在性を確信し、そのことの可能性を明らかにしようとした哲学である。(なお、近代の哲学者である以上、彼らの特徴は、「知ること」の意味を「知の主体Subject」の認識のあり方として問題にする点にある。)

5

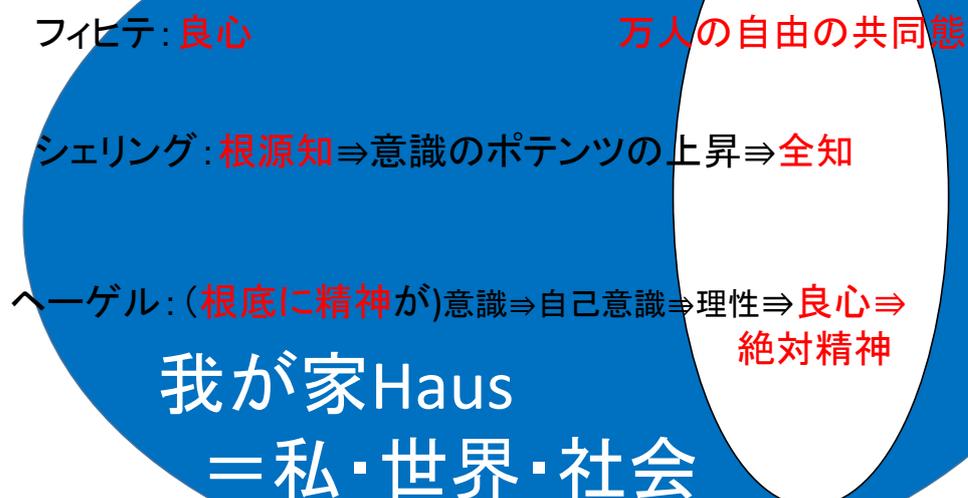
カントの人間精神の理解



6

フィヒテ・シェリング・ヘーゲルの人間精神の理解

世界の道徳的必然性のシステム(歴史と社会)・感性界と叡智界の総合



7

哲学は「故郷(わが家)」の探究である

* 彼らの思想のプラトニックな要素——魂の「故郷」= ἰδέα の世界——は、ドイツの詩人にして思想家ノヴァーリス(1772-1801)の言葉に端的に表現されている。

「哲学とは本来故郷への郷愁 Heimwehであり、——どこにあってもわが家 Hausにしようとする衝動である」

(Novalis Schriften, Bd. 2, hrsg. von H.-J. Mähl, Darmstadt 1999, S.675.)。

8

ἰδέαの「臨界」の意味

「臨界Criticality」、「臨界点Critical Point」

『日本国語大辞典』(小学館、1976年3月刊、縮刷版全10巻)

「さかい。境界。特に、物質がある状態から別の状態へと変化する、そのきわ」

○岩波書店の『理化学辞典』(第1版1935年、第2版1958年)の「臨界点」の説明でも核融合・分裂の説明が出てくるのは1971年5月第3版で初めて

「核分裂連鎖反応が一定の割合で維持される状態をいう。」

○岩波書店の『広辞苑』第2版(1969年)まで「さかい、境界」:1976年12月の第3版から

「①さかい、境界②原子炉などで核分裂連鎖反応が、一定の割合で維持されている状態」

「臨界」という語の意味を「さかい、境界、きわ」という元々の意味で受け取ってここでは使用していく。では、「臨界」の原語と思われる「Critic」の意味はどうなのか。

9

「Critic」の意味

Critical Point のCritical : Critic:ギリシア語の名詞でkrisis(判断、裁判、意見、決着)←動詞krino

ドイツ語:Krisis、一般的にはKrise(危機、岐路、峠)、そしてKritik(判断、批判)

このKritikはカントの「哲学」に関する基本的な考え方。

カントの哲学は「批判哲学 Kritische Philosophie: Critical Philosophy」

その意味するところは、哲学は自らの認識能力の「批判」のシステム、

すなわち「自己批判」のシステムでなくてはならない、ということ。

Criticとは、重大な岐路・岐点・決定的な境界・分れ道

(因みに、感染症を研究する医学の領域で「臨界点」というのは、英語のTipping Pointの訳語で、流行の爆発的転換点を指す)

○ideaとἰδέαの違い

観念論⇄実在論

idea(表象、想像、夢想:一般に存在・実在の可能性が問われない、もしくは持たないもの)

ex.5キロの金塊、

ἰδέα(理想、理念、完全性、絶対性:存在を感性的に確認できないとしても、理性・知性によってその「存在」を類推できるもの)ex.完璧な真理(球体・三角形etc.)、

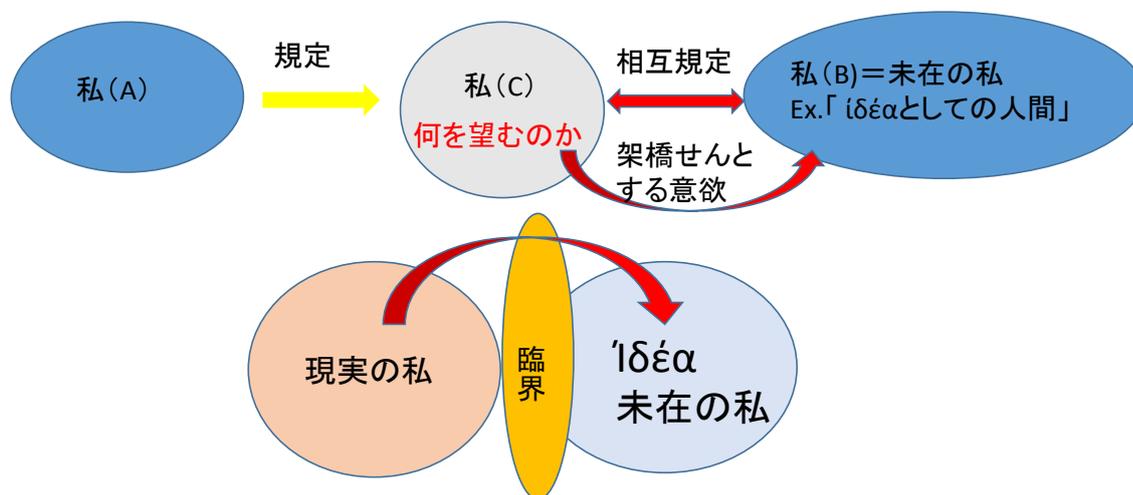
10

ιδέαの「臨界」に向かって——理想と現実の架橋

「私(A)は私(B)である」1.

「私(A)は私(B)である」を意識する私(C)

私(A) = 過去の私 私(C) = 今の私 私(B) = 未在の私



11

ιδέαの「臨界」に向かって——理想と現実の架橋

「私(A)は私(B)である」を意識する私(C)

私(A) = 過去の私 私(C) = 今の私 私(B) = 未来の私 と想定してみる

A、B、Cの私は、同じだけれど違っている

AがCを形創ってきたというだけではない

将来どのような「私」(B)になろうとするのが、Cを決定してくる

Cを「未在の私」(未だ存在していない私 das noch nicht-seiende Ich)と名づける

*「未在の私」をできるだけ「人間のιδέα = 理想」に近づけて想定してみる

過去のAの必然性に縛られた現在のCが、可能的なBを目指して生きること、

「人間のιδέα = 理想」をどのように考え、それをどのように実現しようとするのが、問われる。

*これはある意味「**現実と理想を架橋する**」試みと言えるだろう

この試みの**限界・きわ**に「ιδέα = 理想」の「臨界」が、まさしくCritical Point「臨界点」が現れる

12

「私は人間である」は本当なのか？ :: 「私(A)は私(B)である」2

人間とは何か？

1. 「人間は人間にとって狼である」

2. 「人間は人間にとって神である」

○ では、私は一体どのような「人間」なのか？

敵さえも愛することができるのか？

親兄弟でさえ疑うのか？

○ 「人間」の本質とは何か？という問いを立てる時⇒

同時に、自分自身の「人間」性が問われ⇒

善と悪との両方に加担しうる自分自身に気づかされる時

Ex. 私(悪・A)はどのようにして私(善・B)たりうるのか？と問う私(C)が出現

この(C)はメタレベルの「私」であって、(A)と(B)の両者を俯瞰する立場

* 「未在の私」をιδέα化するその程度に応じて「現実の私」が覚醒される⇒

ιδέαは、「現実の私」に対して**否定的＝肯定的に作用する**

(ゴッホの例: 22枚目参照) 13

さてところで、「私は人間である」は本当なのか？

私たちは折に触れて「私(A)は私(B)である」ことを**意識する**

その際、前者の私Aと後者の私Bの同一性と、そして差異性とを**意識する**

「私は誰なのか？」、「本当の私とは？」と**問いかけてみる**

その時AとBの間に何らかの径庭が存在していることに**気づかされる**

このAとBの間に、1年、5年、10年といった時間的な幅をもたせると、両者の差異性が強く**意識される**

上の**赤字**の意識主体はAとBであると同時に、両者を意識するメタレベルの「私」

「私は人間である」というのはどうであろうか。「人間(の本質)」をどのようなものとするのか、によって「私」の形姿は異なってくる。西洋でまったく対極に位置する二つの「人間像」が語られてきた。

- 1. 「人間は人間にとって狼である」
- 2. 「人間は人間にとって神である」 が、それである。

分かり易くするために「神」を「愛」や「自由」という概念に置き換えてみるとよい。敵さえも愛するのか(2)、味方さえ疑うのか(1)、このどちらを選ぶかによって、「私」はいかなる「人間」であろうとするのが、選択される

* 「人間とは何か」と問うことによって、「あなたはどのような人間なのか」、「私は人間である」は本当なのか、が問われてくる

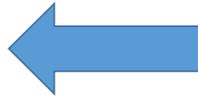
私の「ιδέα」と世界の関わりについて

私の「ιδέα」= 普遍的な人間像



私たちの「ιδέα」= すべての人の幸福 = 「ふるさと」の構築

「ふるさと」の構築に一番積極的に関係するのは、思想的には「哲学」、具体的には「建築」



建築家 archi- tekton (ギarche始まり・源 + tekton 作り出す人) (ラarchitecta :-ton: -tura: archi + tectum家・住居・屋根 ←tego覆う・包む・保護する)⇒私たちを守ってくれる**住まいの根源 arche = 「ふるさとHaus」の創り手**

* 哲学者はarcheの探究者

哲学は「**建築術Architektonik(独)**である カント「私が建築術ということで理解しているのは、体系=システムの技術のことである。体系的統一とは通常認識をはじめて学とするもの、すなわち認識の単なる集積から一個の体系をかたちづくる当のもののことである。だから建築術は私たちの認識一般における学的なものをめぐる教説であり、したがって必然的に方法論に属する。」『**純粹理性批判**』(B860)

15

私たちの「ιδέα」と世界の関わりについて

今回研究発表をされた皆さん方も同様の経験をされているとは言えないだろうか。あるアイデアを得て「研究課題」を設定し、その課題を解き明かし、解決の方法を見つけ出そうとすると、そして解き明かしたと確信するとき、この二つの「とき」の間の「私」は、確かに違っているのではないか。もっと長いスパンを考えてみてほしい。子供の頃あなたはなに憧れていただろうか。その憧れを今どのように現実化できているだろうか。そして今現在の「未在の私」への憧れは何だろうか。

この違いを意識するとき、私たちは明らかに「理想の住まい=ふるさと」へと「架橋しようとする」、あるいは「架橋している」という、そして「架橋できた」という意識的な営みの只中にある。ということはつまり、この意識的営みにおいて、「哲学すること」に携わっているのだと、言えるのではないか。こうしたことは、学者や建築家や研究者に限ったことではない。私たちは誰もが日常的にこうした関わり方を、「私自身」の最も身近な場面で、会社や、社会や家庭のなかで、すなわち、この「人生」のなかで、試し、そして試されている。

16

Taisei design challenging all possibilities

• AXIS 4月号増刊 から

- P.26 Rethinking Architecture for a Sustainable Future
- P.32. Architecture for Passing on Hopes and Memories to the Future

その目標となるものを、概括的に言うと、「私はどのような建築を望むのか」あるいは、「どのような住まいが望まれているのか」と表現することができるだろう。この「理想とする住まい」=「故郷」を目指して、自身の能力を傾注し、構想を練り上げ、実際に建築術を行使し、建物を完成させていく。

ここには「建築」をめぐる「知」のシステムティックな営みが、それゆえに、「 $\text{i}\delta\acute{\epsilon}\alpha$ 」と「現実」を架橋して「故郷」を構築せんとする「哲学すること」が認められよう。

17

セレンディピティーと「 $\text{i}\delta\acute{\epsilon}\alpha$ の臨界」

山中伸弥さんと田中耕一さんを招いたシンポジウム(NHK 関西WEB NEWS 9月21日)
「不確実性ととも生きる—未来への鍵」

山中さん: どうなるか分からない中でも明確な将来像を描き、一生懸命努力し続けて研究を進める

田中さん: 思いどおりにいかない場面がチャンスにつながることもある: 一番若かったのが貧乏くじを引かされた

科学的な新発見に遭遇した方々が語る、「偶然の幸運・呼びかけ」
=セレンディピティー

$\text{i}\delta\acute{\epsilon}\alpha$ からの呼びかけ?

そのことを彷彿とさせる二人の哲学者の言葉をここに引いてみる

* 15世紀のはじめの年生まれのドイツの哲学者N.クザーヌス(1401-1464)の言葉

「私が神を見る眼は、神が私を見ている眼である。神が私を見ていなければ、私は決して神を見ることができない」(『神の見ることについて』)

* オランダの哲学者スピノザ(1632-1677) の言葉

「真の観念 *vera idea* をもつ者は、同時に、自分が真の観念をもつことを知り、そのことの真理 *veritas* を疑うことができない」(『エチカ』第2部定理43)

18

セレンディピティーと「ιδέαの臨界」

○「人間のιδέα＝理想」とは、あまりに高邁な遥か彼方の夢想・幻想ではないのか？

* 科学的な新発見に遭遇した方々が語る、「偶然の幸運・呼びかけ」＝セレンディピティー

「人間のιδέα＝理想」もたしかに、それほどに稀なものなのかもしれない。

それに私たちの側が近づこうとして、追い求めれば求めるほど遠ざかっていく。昼夜を分かたず、寝ても覚めてもアイデアを探し続けていると、向こうの側から「呼びかけてくる」。

* 中世と近代との狭間の時代の15世紀のはじめに生まれたドイツの哲学者N.クザーヌス(1401-1464)の言葉

「私が神を見る眼は、神が私を見ている眼である。神が私を見ていなければ、私は決して神を見ることができない」(『神の見ることについて』)

* オランダの哲学者スピノザ(1632-1677) の『エチカ』には次のような言葉がある。

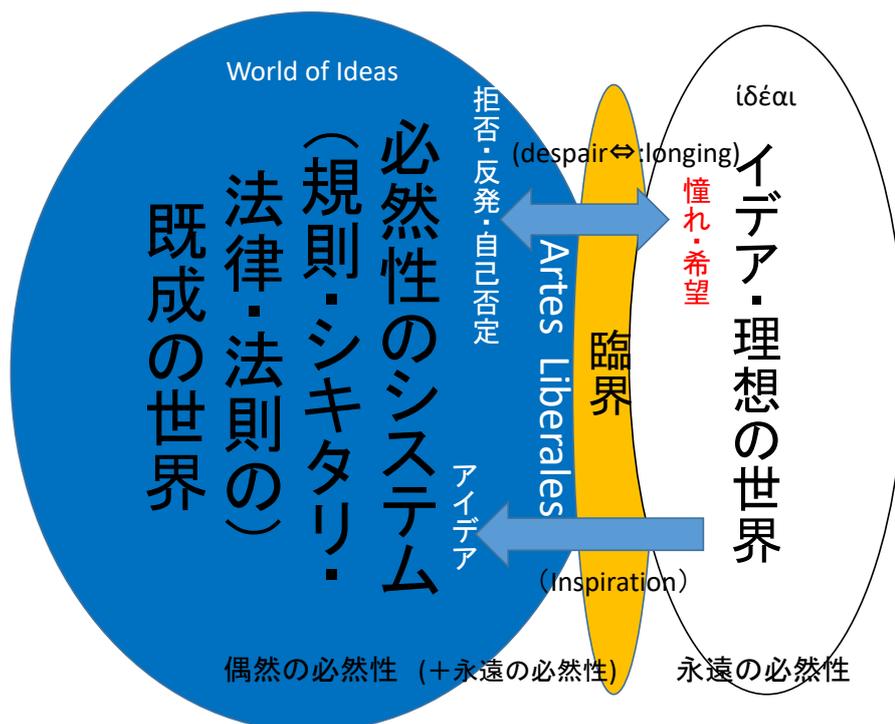
「真の観念 vera idea をもつ者は、同時に、自分が真の観念をもつことを知り、そのことの真理 veritas を疑うことができない」(第2部定理43)

○「おのれを無にすれば、真理の側が姿を現してくれる」

「おのれを無にすること」は、限りなく可能性は小さいだろうが、不可能だともいえないだろう。

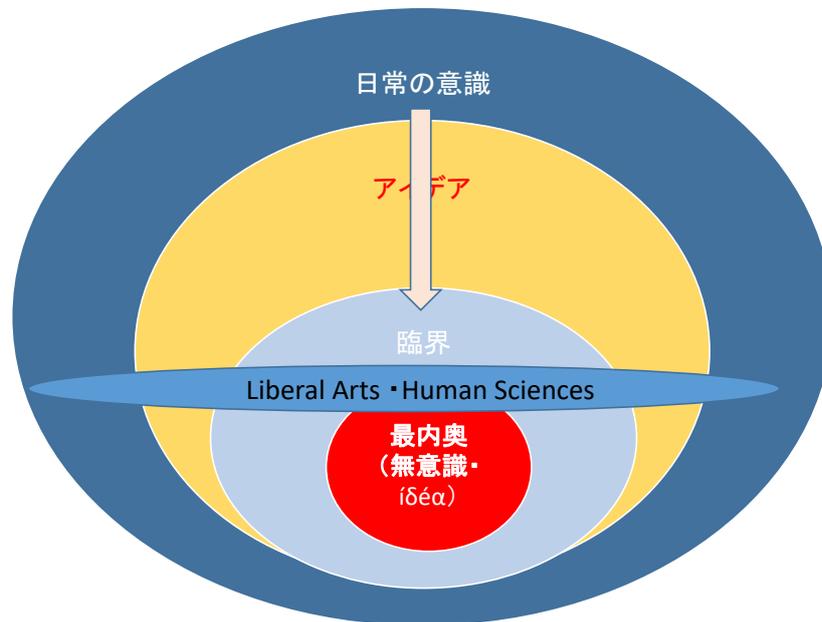
このように、セレンディピティーとは、まさしく、ιδέαの「臨界」に触れ(られ)ているということではないか？

19



20

「私」の心のなかの意識の構成



21

「íδέαの意識」はつねに否定的に働く。「未在の私」が不可欠の「他者」として、必然性のシステムに縛られた「私」に、「自由であれ！」と呼びかけるからである。そのことに自覚的であるということが、「否定性」の本来の意義である。その一例をフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)に見る。

彼は、自らの行く末に煩悶していた時期に、次のような言葉を記している。

「僕は自分の不正実において誠実であろうとする人間なのだ。いかに変わろうと、僕は同じ人間だ。ぼくの苦悶といえ、つまりはこういうこと——いったい僕は何の役に立ちうるのか、僕はいわば役に立つ、有用な人間たりえないのか、どうしたらしかじかの問題をもっと長い間深めていくことができるのか。...こいつが絶えず僕を苦しめているのだ。」(『ファン・ゴッホの手紙』みすず書房、2001年、45頁)

「僕は何の役に立つのか」、この問いはファン・ゴッホが生涯負い続けた問いであり、この問いとの葛藤のさなかにおいてこそ、あの画家ゴッホが誕生したと言っても過言ではない。

汚泥のなかに美を認め、土にまみれた農民に密着せんとしたゴッホの描く作品は、当初ほとんど見向きもされず、両親からも疎まれていた。それ以後の作品の数々も、画商であった弟のテオ以外誰にも評価されず、それこそ何の役にも立たない駄作と見なされ、自分でも最後まで疑念に苛まれ続けていた。

アムステルダムのゴッホ美術館に展示されている創造性に満ちた数々の作品はどれも、自分の描く絵が「何の役に立つのか」という、この問いに誘発されて描き出されたものであったろう。「何の役に立つのか」、これは確かに厄介な問いではあろう。ただし、ゴッホの苦渋に満ちみちた生涯を想うとき、自問する自己否定的なその問いによって促される**向かうべき方向**は、自身が理想とする「íδέαの画家」であったはずである。「役に立つ」という必然性のシステムによって外的に押し付けられた有用性など、実は、ゴッホの創造性とはまったく無関係であったと言わなくてはならないだろう。

22

まとめ

「*ιδέα*の臨界」とは、このように理想と現実の狭間にあつて、私たちに呼びかけ、かつ呼び寄せようとしている「*ιδέα*のきわ」のことを指しています。「リベラル・アーツ」をそこに挿入しているのは、これら「自由7芸」(文法・修辞・論理+数学・幾何学・天文学・音楽)+哲学+芸術が、それらがもつ普遍的な術*ars*ゆえに、*ιδέα*の臨界に私たちを導く方法でありうる、と考えられるからです。たとえば、論理学と数学・幾何学を考えてみましょう。どれも、いつどこであれ、誰もが認めざるをえない普遍性をもっていることが理解できるでしょう。音楽もまた、天界の調和(*harmonia mundi*)を奏でるものであるとみなされてきたことは、よく知られています。哲学はもちろん、普遍的なものを対象として、自ら普遍的になるべく努めるわけですし、芸術も、たとえば絵画における美は、「永遠なるもの」や「無限なもの」の描出として、私たちを感性的にそれらに触れることを可能にするものと考えられるでしょう。これらは総じて「人文学 *human sciences*」と言われるのですが、これらは、あらゆる学問・科学の根底にあつて、人間を*ιδέα*の方向へと導く役割を担っているのです。知はすべて「人間」に関わって初めて、その意味を見出しうるものだからです。

してみると、「*ιδέα*の臨界」に向かつていくには、「人間であること」の意味を改めて問い直すことが必要になるでしょう。自分とはどのような人間なのか、どのような人間になろうとするのか、と問い直すとき、自分自身を*ιδέα*の鏡に映し出して反省することが求められるのです。そのギリギリの境界、「きわ」が、すなわち「*ιδέα*の臨界」なのだと思うのです。

23

*ιδέα*に触発されることで絶望に陥ることもあるかもしれません。それは当然と言えば当然なのです。映し出される自分の形姿は*ιδέα*に比べてあまりに貧弱でしょうから。そのことを認めたくえで、さらには*ιδέα*に反旗を翻す自分の可能性さえも肯ったうえで、それでもなお*ιδέα*を目指そうとすることができるなら、その時そこに「自由」が、そして「哲学すること」が現実化してくると考えられるように思います。自らの知の限界を弁えることを説き続けたカントの「批判哲学」は、そのことを教えてくれているのです。

このように、*ιδέα*は私たちを導くものでありながらも、必ずしも私たちを受け入れてくれるとは限りません。それが*ιδέα*である限り、私たちにとって限りなく貴重なものでありながら、なお、限りなく遠い、私たちを撥ねつける、「否定的なもの」でもあるからです。現前しているわけでもない*ιδέα*、しかし、そうであるがゆえにこそそれを現前させる務めがわたしたちに委ねられているのではないのでしょうか。そうであるならば、いや、そうである以上、私たちは少なくとも「*ιδέα*の臨界」に向かつて進もうとせざるをえないし、そしてそこに触れる可能性を試そうとするとき、「哲学すること」が現実化しているのだと、私は思うのです。

最後に、最初のカントの言葉に戻って、それでは、「哲学」は学べないのか、ということですが、これまでの話しでお分かりいただけたかと思いますが、かの哲学者たちの「哲学」とはまさしく「哲学」の*ιδέα*、すなわち「哲学そのもの」だったのですから、「哲学すること」が現実化している時、実は私たちはすでにして「哲学」に触れているのだと言えるでしょう。その意味では、ともあれ、それを学ぼうと志して、「*ιδέα*の臨界」に向かおうとすることが大切だということになるでしょう。

以上です。拙い、大まかな話を、ご清聴いただきありがとうございました。

24